

Title	<展評・書評>杉山博昭 『ルネサンスの聖史劇』 : 中央公論社、2013年
Author(s)	黒岩, 卓
Citation	ディアファネース -- 芸術と思想 = Diaphanes: Art and Philosophy (2015), 2: 183-185
Issue Date	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/216989
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

【書評】

杉山博昭『ルネサンスの聖史劇』、 中央公論新社、2013年

黒岩卓

本著作『ルネサンスの聖史劇』は、十五世紀フィレンツェにおいて平信徒で構成された兄弟会のフェスタイオーロ（祝祭委員）によって上演された、宗教劇の一形態である聖史劇の包括的な研究である。全体は八章からなり、大きく第一～七章までの論考と第八章における翻訳とに分けられる。

本著作を読んでまず驚かされるのはそのアプローチの幅広さである。作品の読解はもとより、祝祭行事との関連づけ、同時代の証言から推測される観客の反応、フィレンツェ聖霊兄弟会の財産目録や出納記録の調査、絵画画像の検討、作品の日本語訳や作品目録の作成といった様々な学問分野に渡る作業が本著作では総合されている。本来、演劇という芸術形態は—もちろん本書で扱われているものは今日のそれとは異なる点が多いが—その成立と受容の過程の複雑さから、文学、美術、音楽、建築などのみならず、政治、経済、宗教、情報流通といった分野までをも抱合する事象である。本著作の切り口の多様さはその対象にまさに相応しいものだといえる。

こうした様々な研究分野を横断する杉山氏の研究の根本にあるのが、聖史劇の「再構成」、すなわち聖史劇の上演という共同体の経験を包括的に理解しようとする意志だろう。杉山氏は本書の冒頭で以下のように述べている。

本書の目的は、台本、制作、上演という三つの要素から多角的に考察することをとおして聖史劇という表象を再構成すること、さらにその受容にかんする検討をと

おして聖史劇が当時の社会で果たした役割と機能をあきらかにすることである*¹。

この「再構成」の試みが見事に結実しているのが、ロシア正教の司教アブラハムの見物記録を主な手がかりとして、聖堂の内部構造などを考慮しながら上演の効果を検証しようとした「室内」の章、また宗教行列の慣例や祝祭で用いられた山車の使用法を参考にしつつ、野外での聖史劇上演の実態を検証した「野外」の章だろう。加えて同じ「野外」の章、そしてとくに「脇役」の章で行われている作品分析も、聖史劇の社会的機能について鋭く切り込んだ論考になっている。

しかし杉山氏はそこから一歩進んで、フェスタにおける聖史劇の見物と同時代の絵画鑑賞の経験を横断させ、十五世紀フィレンツェ人の心の動きを探ろうとする。その野心的な試みが行われている「図像」は本著作のダイナミズムが最もよく表れた章だといえるだろう。この試みの原動力となった杉山氏の方法論的主張が「図像」の章の最後にまとめられている。

重要なことは、典拠や源泉という特権的な概念を用いて一方向のベクトルに議論を単純化することではなく、複数の表象領域間を循環するベクトルを措定し、経験や記憶の複雑さに光を当てることではないだろうか。当時の人々が図像を前に抱いた記憶はすでに失われて久しく、聖史劇を見物し快哉を叫ぶ人々の記憶もまた同様である。しかしこの両者の経験を交差させることは、失われた記憶の一端を再構成する可能性を拓く。この意味において聖史劇は、美術史をはじめとする表象文化研究において貴重な参照項であることは確かである*²。

こうして様々なアプローチを駆使することにより、杉山氏は十五世紀のフィレンツェで制作された聖史劇という「世界最大のメディア」(233頁)を、生きたそしてまた生きられた形で蘇らせるための貴重な方法論を提示したといえるだろう。

他方で杉山氏はヴェントローネとポリッツォットといった先行研究者に倣い、これまで蔑ろにされてきた聖史劇の上演台本の読解に積極的な意義を認めている。その最も顕著な成果は言うまでもなく全体のページ数の三分の一以上を占める聖史劇諸作品の翻訳である。加えて巻末に付せられた上演記録と上演台本のリストによって、イタリア聖史劇の上演に関する諸特徴が一望できるようになっていることも見逃せないだろう。

以上のように本著作は、演劇研究に本来必要であろうアプローチの幅広さを堅持しつつ、イタリア聖史劇に関しての包括的なヴィジョンを日本語で提示することに成功している。杉山氏が本著作でまとめられた研究が今後どのように広げられまた深められるのか

*¹ 杉山博昭『ルネサンスの聖史劇』中央公論新社、2013年、7頁。

*² 前掲書、220頁。

大いに注目されるところである。

最後に全くの蛇足ではあるが、同時代のフランス語による劇テキストを学ぶ本書評の筆者の立場から、今後の発展が期待される（と筆者には思われる）テーマを指摘してみた。それはイタリア聖史劇の劇テキストとしての成立、伝承と受容である。祝祭行事としての聖史劇の再構成という本著作の目的から外れるゆえに扱われていないことは当然なのだが、杉山氏が55頁の注32や228頁以降で指摘している聖史劇の書籍としての受容は、今後聖史劇がイタリア文化史上で有していたインパクトを探る上で重要なテーマになりうるのではないだろうか。例えばフランス語圏の聖史劇に関しては、1548年にパリ高等法院によってパリでの聖史劇上演が禁じられたことが同ジャンルの衰退を象徴する出来事としてよく言及されるが、聖史劇を読むことが禁じられていたわけではないことはあまり知られていない。未だ十分に解明されているとはいえない読み物としての聖史劇の影響を探ることで、本著作の意義がより一層高まるのではないだろうか。他方でまた、劇テキストの伝承を考える上でもイタリア聖史劇は極めて特権的な事例たりうるように思われる。フランス語圏においては劇テキストが印刷本のみ、あるいは写本が残されていてもただ一つの写本のみでしか残されていないことが多い。そうした場合ある作品が再上演されさらに読書用テキストとして受容されるに当たり、どのように本文やト書きに改変がなされたのか（あるいはなされなかったのか）を辿ることは著しく困難になる。これに対してベルカリーの『アブラハムとイサクの聖史劇』が25の写本に残されており、またイタリア聖史劇諸作品の多くが複数の写本資料に残されていることを杉山氏は指摘している（33頁）。この保存状態はフランス語圏の聖史劇や笑劇などに比べると恵まれているように思われる。同一作品の複数の写本・印刷本を比較検討することで、ある上演されたテキストが再上演されまた読書用の書物に変化する過程を具体的に検証することができるのではないだろうか。具体的な上演にまで遡ることが困難だったとしても、各写本の用途に従ってどのようにテキストが変化していくのか（あるいはしないのか）を辿ることは可能なのではないだろうか。無論これらは筆者の甚だ勝手な期待ではあるが、本著作がフランス語圏の聖史劇を学ぶ者にとっても参考となるような様々な展望を示してくれていることは強調しておきたい。イタリア聖史劇の世界を日本語で包括的に提示してくれた杉山氏に深く感謝する次第である。

イタリア・ルネサンス、とくに同時代の心性を総合的に理解しようとする上で、様々な芸術ジャンルを横断して作られる聖史劇の研究は、その作者や関係者が無名作者からロレンツォ・ディ・メディチなどといった政治家にまで及ぶだけにいっそう大きな貢献を成すことは疑いをえない。本邦初訳の作品を多数収録した杉山氏の本著作は、この分野の基本文献として今後長きに渡って文学・演劇史、あるいは中世・ルネサンス文明に関心を持つ人々にとっての必読書となるだろう。